

平成24年度県立大学地域貢献研究の研究成果について（完了報告・中間報告）

| | |
|---|---|
| 研究テーマ | 連携・協働による地区景観まちづくり支援の実践的展開 ——永平寺町「永平寺川・本山エリア」を事例にして—— |
| 研究期間 | 平成 24～25 年度 |
| 主たる研究者 | 【学部・学科】看護福祉学部社会福祉学科 【職・氏名】教授 北條蓮英 |
| <p>○研究目的</p> <p>本研究は、永平寺町景観計画（平成20年策定）で示されている6エリアのひとつである「永平寺川・本山エリア」を事例にして、連携・協働による地区景観まちづくり支援を実際的に試みることを目的とする。研究方法は、住民参加によるワークショップ方式ですすめる。学の立場から必要な情報提供と住民の学習、フィールドワークによる身近な「生活景」の気づき（再評価）、景観価値の共有化、等を通じてまちづくり協議会の立ち上げを2年目の目標とする。また、2年間の知見を基に、今後、他のエリアに適用を拡大したり、さらには県下の他域での活用に資するように参照資料となるように整理する。</p> <p>○研究成果</p> <p>1) 本研究における「連携・協働」の具体的な成果としては、第1には、永平寺町と県立大学景観研究会（代表、北條蓮英）とが協定を締結したこと。第2に、こしの国ケーブルテレビの協力支援をうけることができたことで、各回のイベントの開催案内の広報、各回のワークショップの収録、その概要のニュースとして発表等の地域住民への情報発信の役割を担っていただいたこと、第3に、町の景観審議会との連携をしてすすめたこと、第4に、各種団体、機関との連携をはかることができたこと。</p> <p>2) ワークショップは、都合4回開催。第1回目だけはテーマが「景観講演会とシンポジウム」という形式のため、やや一方通行的傾向になったが、第2～4回は、オリエンテーションと各回のテーマについての研究者によるプレゼンテーション、これらをもとに、数名のグループに分れてグループワークを実施、議論の結果を壁新聞（ポスター）にとりまとめる。回を重ねることに熟達し、触発的な議論になり、学習効果が得られた。</p> <p>3) 阪大大学院小浦准教授による基調講演の要点は、景観計画策定自治体調査によると、ア) 景観計画のきっかけは「地域づくり」。景観に与える影響の大きい大規模なものの制御を直接的な規制対象となっているが、その背景は「地域性や、地域らしさを守ること」にある。イ) 景観法では、景観は国民共通の資産であるされている。景観は公共財であること、景観は総合性を有すること、ウ) 景観は協働で、育み・創造するもの、エ) 今後の景観まちづくりの取り組みにあたり、地域の固有性・特性を伸長すること、その地域固有の環境を世代的にどう伝えるかがポイントとされた。</p> <p>4) 地元住民をパネリストにした景観資源発掘のシンポジウムでは、地元住民の目線からみた多岐にわたる景観資源が抽出された。パネリストの報告のキーワードは、ア) 四季の劇的な変化にとっても感動、イ) 豊かな自然、つながり、地域愛着は誇るべき財産、ウ) 結は、守り育てたい「見</p> | |

えない景観」、エ) れんげ米、あかとんぼがすむ水田、オ) 生活の生きざま・姿をみせるのが生活景、カ) 廃線跡地の景観づくりに住民、利用者の声を、キ) 自分たちのまちづくりは自分たちの手で、ク) 地元景観の良さを再発見したイベント、ケ) 気楽に一步半歩踏み出そう、コ) 話し合いの場ももっと広い範囲で、サ) 「土なぶり」も身振りで伝えていかないと、シ) 自然体の態度が景観の維持になる、ス) 住みよいまちづくりはよき景観づくりの近道、セ) みんなで守るルールづくりの合意形成は大事、ソ) 貨幣価値で表されにくい景観価値の共有を。

5) このシンポの概要を広報するため「まちづくりかわらばん2号」を発行し全町民に配付、あわせて、その内容の評価のため住民意向をアンケートした。

その結果によると、編集上やや詰まりすぎ感のあった紙面であるが、これに対する読者住民の評価は、概ねよいとの結果が得られ、またパネリストが指摘する景観資源の存在に対し、読者からみて改めて景観としての気付きがあるとの評価も得られている。このことからイベントに参加したのものとしていないものとの相互性を図る上での広報媒体の役割が小さくないことがあらためて確認できた。

6) 各回(第2～4回)のワークショップ参加者の意向調査結果では、満足度はきわめて高い。参加経験が複数になると、グループワークも熟達し、触発効果が得られている。要する時間については、予定では、2時間半の計画であったが、グループワークの盛り上がり等から、最低3時間は確保しておくことが必要といえる。

7) 第2回ワークショップ「まちあるき」では、5つのグループに分れて、実際の町を約1時間かけてタウンウォッチングし、魅力的景観要素と、気になる景観要素を抽出、デジカメで撮影、その画像をつかって、グループワークにおいて、景観特性の整理、あわせて景観まちづくりテーマを文言表示した壁新聞を作成した。グループごとの景観テーマは以下のとおりである。

ア) 交通要所班(東古市)・・・テーマ:交通の要所の歴史を感じる街並み

イ) 禅定道(旧永平寺街道周辺)・・・テーマ:今に観る地区をつなぐ生活空間と環境

ウ) 京善歩き隊(京善地区)・・・テーマ:四季と歴史と自然の息吹きを感じる古民家佇む京善!

エ) てくてく(市野々・荒谷)・・・テーマ:市野々・荒谷で小さい秋見〜つけた

オ) 景観スクープハンターズ(門前)・・・テーマ:門前地区全体を本山参道として位置付けた景観は?

以上のように、各班とも、感性豊かな目で、ストーリー性のあるテーマがイメージされた。

8) 第3回ワークショップでは、緑をテーマに「雑草と生物多様性」を切り口にプレゼンテーション。

① まちの緑、山の緑・永平寺川・本山エリアの緑被図と植生図、・まちと、まちの緑の変遷

② 里の緑 - 豊かな自然が育む永平寺米 - ・米作りを支える田んぼの生きもの・大切な永平寺の在来種(植物)

③ 人が支える永平寺の自然・草刈の大切さ・田んぼの絶滅危惧植物

ア) 雑草であっても生物多様性の保全の観点からみると、意味のある存在であること、畦畔の草刈りについて、計画的に実施(月と回数)すれば適正な管理ができること。

イ) レンゲ米の取り組みは、化学肥料に頼らない米づくりとして評価できるが、環境保全型農業は、それに加えて、畦畔管理など多面的なとりくみが課題であること。

ウ) 落葉広葉樹は、今から5千年以上前の縄文時代以降、燃料にする薪を採り、肥料にする落葉を掻くといった人と自然の関わりの中で成立してきたものだ。落葉広葉樹には、その長い年月の間に適応してきた種々の生物がいる。したがって、森落葉広葉樹(2次林)を放置して常緑樹林化する、生物多様性がうしなわれる。里地里山の保全のためには、森に手を加え、明るい森づくりをすることが課題である。

9) 第4回ワークショップでは、農業問題をテーマに「協働・連携の力で食と農を支える」についてプレゼンテーション。

6次化について、もともとは、小さな地域の取組みである。つまり、

- ・ 地域の資源の活用、少量多品目への着目、付加価値を高めて売り方を工夫するものづくり、小さな産地づくり、人（生産者、応援団）づくり、つながりづくり、
- ・ 最終的な目標は食と農が連携した豊かな地域社会づくり（身近に農があり、食べることを通して農を意識できる社会）

その背景には、重要なCSAの考え方がありCommunity Supported Agricultureについて解説があり、「地域」が支える農業、「参加型社会」に根ざした「私益」（自助）、「共益」（共助）、「公益」（公助）のしくみづくりの考え方がしめされた。